

健康文化

## 人それぞれの感動そして喜怒哀楽

高田 健三

私と同年配の友人に、“日本の百名山”を総て登り尽くした登山家が居る。数年前の年賀状にそっと一言付け加えてあったところが彼らしい。早速、電話でお祝いの言葉を送ったが、その時、次の名山シリーズへの挑戦を始めたと聞き、本気なのかと疑ってしまった。キャンプ用品をリュックに詰め、ただ独りで登るのが彼のスタイルである。思わず何が魅力なのかと口走ってしまったが、“そこに山があるから”と言う、イギリスの登山家ジョージ マロリーの名言が浮かんで、愚問だったなと思った。

私は脚に自信がないので、本格的登山は考えたこともないが、里山の自然は好きなのでよく出かける。クルマで近づける所まで行き、少しでも自然林（雑木林あればさらによい）に浸りたいと思えば、その先は自分の脚を使うしかない。そんなことで日帰りのドライブを楽しんでいたが、観光バスなどが立ち寄る史跡や景勝地などと違ったスポットが見つかる嬉しくなる。

子供が成長し小学校に通うようになると、夏休みは彼らにとって最大の楽しみである反面、宿題をこなす苦労も人生最初の試練である。我が家は一人っ子なので、兄弟姉妹の知恵を借りられない。家内の相談を受けて、ならば“旅の日記”の作成などはどうかと言うことで、例年、時間がとりやすい夏休み中に、仕事の段取りをつけることにしていた。かくして私の国内旅行は始まった。

旅行に付きものの交通機関の指定など必要のないドライブ旅行ならば、ホテル、旅館の予約さえ手配しておけば、手荷物はトランクに放り込み、気軽な服装で良い。交通機関などの時間を気にせずに、自由なコースがとれる上、マイカーという空間は、我が家の延長みたいなものである。

しかし、大人と子供とでは興味の世界が違う上、自ずと子供の体力にも合わせるプランになる。後日、子供時代の旅行の話になった時、そんな事あったかなど、記憶に薄い返事が帰って来たりして、苦労して暇を創ったのにとがっかりすることもある。戦後の世相をズーッと見続けて来た私には、親と子の“絆”は時代が進むにつれ、文字自体と共に薄れて行くように思えて、寂しい気がする時がある。

“昔”に拘る積もりはないが、歴史を留める地方の文化やカントリーサイドの風景に惹かれる。しかし、今や鄙びた地方の村落でも、家を建て替えするときは、何々ハウスと言った建築会社のモダンな家屋になってしまう。“むく”の木材の家など、贅の極みになってしまった。一軒が変われば、集落の変貌は時間の問題である。そしてまた一つ、日本の原風景が消えて行く。

所が時々、“木の家”と言う住宅の案内を見るようになった。やはり日本人の血の中には、木造文化の記憶が残っていると、自分自身を納得させている。そう言う自分自身、三十数年前、家を建てるとき、木造かコンクリート造りかで迷いに迷った末、当時の地震学教室の知人に相談した所、東海大地震が近いよと言われ、即座にコンクリートに決めた。それ以来三十有余年、幸いにも当地方では大震災は起こって来なかった。しかし、その事の方が心配である。

40年前頃、木曾三川の一つ、揖斐川の源流域に発生学研究に欠かせないイモリを採集に行っていた村落がある。このあたりの集落では、面長で目鼻立ちが整った人を時折見かける。村に一軒だけある小さな“旅籠”の主人の夜話に依ると、その昔、京の都から公家の落人達が、この先の越前と美濃の国界の険しい尾根を超えて、遙々この地に逃れて来たと言う。京の都と遙か遠いこの寒村を結ぶ悲しいロマンである。話を聞いているうちに宿の主人も、何となくその末裔のように思えて来る。以前、早稲田大学の研究グループが、調査に訪れた事もあったらしい。歴史の表に出ることもない、小さな山村に纏わる一つの小さな歴史物語である。

定年退官後何年かして直接実験に携わらなくなってから、時間に余裕が出来て家内と旅する機会が増えた。百名山には及ばないが“日本国の輪郭”ぐらいは、地図上だけではなく自分の目で知っておいてもいいと思い、名のある海岸線は大方尋ねたが、未だ東北地方東海岸が残っていた。中でも陸中海岸は我が国屈指のリアス式海岸で、その荒々しさは以前から耳にしていた。

日本地図と言え、19世紀初頭、伊能忠敬が17年の歳月を費やし、日本全土の沿海部を測量して作成した“大日本沿海輿地全図”がある。現在のように機器や社会基盤が整っていない当時の苦労が忍ばれる。今日の日本地図と比べてその正確さは驚くほどであると言われるが、最後の原本は関東大震災（1923年）の時消失してしまった。所が嘗てオランダの長崎商館付きの医師シーボルトが写しを作り、国外持ち出し厳禁の中、密かにドイツに持ち帰ったものが、現存する全体図とは皮肉である。歴史を担う貴重な古美術や文化財等の継承の裏には、様々な人間模様が潜んでいるものである。

この目で確かめる海岸線のラストとして陸中海岸を選んだのは、十年ほど前

のことになる。青森空港からレンタカーで十和田湖を経へて東進すると、リアス式海岸の中央部に出る。始めて目に入った光景は想像を遙かに超えていた。

名のある岬に通ずるのは国道を離れた細い道である。それだけに崖の上に立ったときの眺めは、また一入である。所々歯の欠けた櫛のように、競いあう様に海に突き出た断崖を、打ち寄せる大波が駆け上り白波を散らす景色は、関東、中部、北陸地方等に見る、長い弧を画く海岸線の砂浜の“静”に対して、“動”そのものの迫力である。中でも“鵜の巣断崖”は、特別な展望台は無く、ただ柵があるだけのスリリングな崖である。恐る恐る身を乗り出して下を覗くと、百メートルを越すかと思われる遙か眼下の崖岩に砕け散る大波のしぶきは、高々と舞い上がり、一方、視線を上げると松の枝越しに空を区切るかのような水平線が目に入る。これぞ“リアス海岸の太平洋”であった。嘗て伊能忠敬もこの地に立って展望したであろうと思うと、その時の忠敬の感動が、時空を超えて感じ取れるような気がした。

海岸の入り江には北上山地からの川が流れ込み、そこにある狭い平地を埋めるように漁師町が広がっている。沖に岬の見える長閑な浜辺で漁網を繕う女の居る風景は、崖に砕け散る海を見て来た目を和ませるものがあつた。私には何時か何処かで見たことのある絵のように思えた。それが後になって、偶然にも“ジプシーの女”と題するピカソの油絵である事を知って、我ながら驚いた。海を見詰める女の横顔は、望郷の思いか淋しさが滲む。そのせいか、未だに心に残る風景である。

次の町の集落に出会うには、ジグザグに崖道を登って国道に出なければならない。その途中、可成り登った所で、道沿いに建てられた案内板のような立て札が目についた。クルマの中から読める限り、“何年何月何日、この地を襲つた大津波はこの地点まで駆け上がった”と言う事実を残すモニュメントなのである。そこから下に見える浜辺は想像以上に遠かつた。大津波の災害に襲われた人々の悲惨な経験を、後世の人たちに伝えたい思いが込められていた。

この原稿を書いている今も、東日本大震災の余波は、三ヶ月余り経つ現在も、状況は悪くこそすれ良くなる兆候もない。大津波に襲われた原子力発電所のダメージにより飛散した放射能汚染は広がるばかりである。事の起こりは3月11日、東日本東方沖で起こつた、(M9)という大地震である。それが我が国始まつて以来と言う程の大災害の幕開けになるとは、思いも及ばなかつた。

大地震の恐怖は、終戦も近い昭和19年12月7日の東南海地震(M8)で十二分に味わつた。翌年の1月13日には、余震とも見られる三河地震(M7.1)が続き、寒空の下、毛布にくるまって過ごすしか無かつた。軍の統制下にあり、

情報が何も入らないのが、更に不安をさそった事を覚えている。

地震災害には鉄壁のはずであった原子力発電施設は、地震と津波のダブルパンチで脆くも破損したというニュースは、素早く世界をも駆け巡った。原発施設的设计、設置などに関わって来たその道の専門家、科学者達も、“想定外”という言い訳とも聞こえる表現をせざるを得ない程の巨大災害なのである。

日に日に放映されるテレビの映像が、太平洋戦争の時の焦土と化した光景と重なり、其の悲惨さが目の奥に滲んでくる。私と家内がリアス海岸の小さな漁村で見たあの素朴で小さなモニュメントの訴えは、一体何処まで届いて居たのだろうか。今回の津波のスケールからすると、その訴えもモニュメントと共に流失したとしか思えない。村人達の無念と深い悲しみは何時まで続くのであろうかと思うと言葉も出ない。

“最良の予言者は過去なり”とは、イギリスの詩人バイロンの名言である。世界でも最先端のレベルにある日本の地球科学の研究をもってしても、地震の予知は難しいという。平安時代初期（869年）に起きた貞観三陸地震（M8.6）は、詳細な記録が古文書に残されている。地震に伴い起こった大津波は、仙台平野全域を水没させる程のものであったらしい。歴史に残る大地震。大津波の記録、地層に残る大津波の堆積物等を、過去から現在までを通して詳細に分析し、地震発生メカニズムの研究を更に進め、人命を第一に、予断を持たず明日の対策を建てるのが急がれる。我々の祖先が代々積み上げて来た自然遺産、文化遺産等が、人間生活の現代化に伴って消えて行く上に、大地震の都度、大きく削り落とされて行くようで辛い。

地震は予知は出来ないと言い切る学者もいる。それならば起こった時の災害を、“最小化”する方策は在るはずだ。何が起こっても、“想定内”と言える対策が立てられ実行に移される日が、一日も早く来ることを願って止まない。

(2011年7月)

(名古屋大学名誉教授)